

第二百二十二話 大東亜戦争と支那戦線

日本は、西方支那大陸で戦い、東方太平洋上で戦い、南方の半島や島嶼群でも戦った。更に言えば、北方に備えざるも得なかった。正に四面皆敵という状態であった。対米英蘭蔣戦争終末促進に関する腹案（1941/11/15）にある「積極方策により蔣政権の屈服」は、なかなか実現しなかった。屈服とは軍事的に撃滅若しくは政治的な手段により日本に少なくとも敵対しない状況を創出することだ。支那戦線における日本の思惑・方策と連合国のそれとが正面から衝突したのである。

1 日本の思惑、対支方策

支那戦線は、日本に多正面作戦を強い、大部隊を大陸に拘束されることになりかねないので、それを回避するため、蔣政権に対する諜報・謀略或いは和平工作、日本に友好的な政権の樹立、要すれば軍事作戦により、対支戦略目的を達成しようとしたのだが、これらはいずれも奏功しなかった。

以下のメモランダムを確認して頂きたい。

第 25 話 様々な対支那和平工作 第 59 話 支那撤兵の決断は

第 179 話 大勝利なるも戦略目的達成ならず、陸軍史上最大の作戦

第 188 話 戦略の大転換出来ずに泥沼に

対米英蘭蔣開戦後は、南方作戦に重点指向するために控えられていた対支作戦が俎上に乗れ、1941/12/24「情勢の推移に伴う対重慶屈服工作に関する件」が決定された。これは重慶政権への謀略工作の活発化を期したものである。軍事作戦は、第 188 話に記した様な作戦を行ったが、所期の成果を得ることが出来なかった。（軍事的な）重慶作戦も検討はされたが、ガダルカナル島への師団派遣決定もあり、重慶作戦は中止・未発となった。困難な地上作戦の代替として、重慶爆撃が実施（1939～1941）された。1942/12 南京駐在大使の重光葵の提唱する「対支新政策」の趣旨が御前会議決定となった。然しながら、南京政権による重慶工作も進展せず、繆斌工作も挫折することとなった。この工作は日本の指導者間に大きな亀裂を生んだとされる。

2 連合国の思惑・方策



連合国側にとって、支那戦線は如何なる意義があったのか？日本陸軍の大部隊を大陸に拘束し、多正面作戦を強いる。また、欧米にとっては悪夢である日支連携・一体化を阻止するために、連合国側に引き留めること。これらが、対支戦略目的だったと考えられる。

この目的達成のため、○支那大陸からの日本爆撃実施、そのための基地建設等（ドゥリットル空襲に衝撃を受けた日本は、浙江省の B25 離着陸可能地である玉山等を抑えるための浙贛作戦（1942/5～9 月、7 個師団）を実施せざるを得なかった。） ○様々な蔣政権支援（援蔣ルートについては第 202 話参照） ○軍事援助（参考第 10 話 義勇兵という名の参戦） ○共産軍の黙認、国共合作の容認 etc ○蒋介石をカイロ会談（1943/11/22）に招待（日米英蘭戦に伴い英米からの支援が縮小した蒋介石が日本と休戦協定・単独講和を締結することを危惧したルーズベルトが蒋介石を招待したものである。尚、この後のヤルタ会談やポッドダム会談には招待されなかった。蒋介石は大国の仲間入りと自讃） ○蒋介石夫人宋美齡に便宜供与（第 11 話 米世論を劇的に変えた宋美齡）

意図すると否とに関わらず、北にソ連が厳然と存在することは日本牽制に極めて有効であったし、ソ連は工作員を通じて蒋介石政権に反日を浸透させた。

3 作用・反作用の狭間で

対外行動は、作用と反作用の狭間で揺れ動く。その反作用の程度を見極めて行動を律するべきだ。その見極めの根拠たる戦略情報の収集と分析が肝要だ。我が国の苦手とする分野なのか？

（了）